『新古今集』春部の柳歌群：崇徳院「いなむしろ」詠の周辺

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 君嶋, 亜紀 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/7004

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

大妻国文　第51号　二〇二〇年三月

『新古今集』春部の柳歌群

――崇徳院「いなむしろ」詠の周辺――

君嶋亜紀

はじめに

『新古今集』巻第一・春上（一～九八）の後半部には、崇徳院の歌、

あらしふく岸の柳のいなむしろおりしく波にまかせてぞ見る　（七一）

を含む「柳」の歌群（六八～七五）がある。「いなむしろ」は稲藁を編んで作った筵（敷物）の意、院政期に古代への関心が高まり、和歌の革新を求め万葉語を発掘するという流れの中で見出された歌語で、歌学書でも諸説の見える難義語である。この歌を起点として、歌語「いなむしろ」の形成過程と、『新古今集』春部の柳歌群をめぐる構想について考えてみたい。

一　歌語「いなむしろ」

はじめに崇徳院詠がどのような潮流の中で生まれたのか確認しておく。歌語「いなむしろ」については、松野陽一氏が後述（↓二節）の住吉社歌合詠を軸に新古今時代までの作例と平安期の歌学書類の説を整理している[1]。まず作例は、松野氏によれば、〈A「川沿ひ柳」との取り合せ〉〈B「田家」との取り合せ〉〈Cその他〉の三例に整理される。いま改めて、崇徳院以前の展開を時代を追って確認してみたい。

歌語「いなむしろ」の古い例は『日本書紀』と『万葉集』に見出せる。

①稲席（いなむしろ）　川副楊（かはそひやなぎ）　水行（ゆ）けば　靡（なび）き起き立ち　其の根は失（う）せず　（日本書紀・巻十五　顕宗天皇〔即位前紀〕）

②玉桙（たまほこ）の　道行（ゆ）き疲れ　稲席（いなむしろ）（原文「伊奈武思侶」）　しきても君を　見むよしもがも

（万葉集・巻十一・寄物陳思歌・二六四三　作者未詳）

①の「いなむしろ」は「川」にかかる枕詞（かかり方未詳）で、『万葉集』の長歌（巻八・秋雑歌・一五二〇「山上臣憶良の七夕の歌十二首」の一）にも同じ用法の例（原文「伊奈宇之呂」）が見える。①は院政期以降の歌学書類に引用される歌で、本文は四句「なびきおきふし」、五句「そのねはたえず」「そのねたえせず」等、諸書により異同がある。詠歌状況については後述する。②では筵を敷く意から上句がシクを起こす序になる。「しきても」を導くために構成された上句の旅路に筵を敷く光景と恋の要素は、次に掲げる③の歌に継承されていく。以上、①②は『古今六帖』に入るが[2]、しばらく新しい用例は見えず、院政期に入って詠まれるようになっていく。

③これにしく思ひはなきを草枕たびにかへすはいなむしろとや　（金葉集・恋上・三五三　藤原公実）

④秋の田のあぜふみしだき鳴く鹿はいなむしろをやしきてふすらん　（散木奇歌集・秋・四四五）

③は勅撰集の初出例。詞書に「つれなかりける女のもとにつかはしける」とある恋歌で、「度（たび）に返す（その都度返して寄こす意。「度」に「旅」を掛ける＝稿者注）は否」と解し、「稲筵を軸に趣向が立てられている」と注される[3]。作者公実（一〇五三～一一〇七）は『金葉集』撰者源俊頼（一〇五五頃～一一二九以前）の庇護者の一人で、③との前後関係は不明だが、俊頼自身も④のように「いなむしろ」を詠んでいる。「また田に鹿の鳴くを聞きて」と題する近江の田上での詠で、「しき」「ふす」と筵の縁語を並べ、文字通り秋の田の実った「稲（穂）」を「筵」として敷き、その上に臥す鹿を想像する。「稲」に因む「田家」の要素をもつ「いなむしろ」詠の初例であり、共通する解釈が『俊頼髄脳』に見える。同書は①の歌を挙げて、「いなむしろ」の語を次のように説明する。

いなむしろ川ぞひ柳水ゆけばなびきおきふしその根はうせず（→①）

A いなむしろといへる事は、稲の穂の出でととのほりて、田に波寄りたるなむ、むしろを敷き並べたるに似たるといふなり。また、B河のつらに生ひたる柳の枝の、水にひたりて流るるが、また、いなむしろに似たるなり。

④の「いなむしろ」はAに相当しよう。また、Bは①詠の二・三・四句の情景から導かれた説であろうか。Bについては続けて①詠にまつわる伝承が語られる。

その柳の木のもとは、はたらかで、枝の水に流れて、波寄るなむ、我かくあやしくなりて、まどひあるくに似たると、昔のみかどの末なりける人の、あやしき童になりて、釣りする者になりて、その柳の本にゐて釣すとて、口ずさびにうたひをりけるとぞ、いひつたへたる。

①詠を載せる『日本書紀』巻十五・顕宗天皇〔即位前紀〕によると、雄略天皇に父市辺押磐皇子を殺された弘計王（即位前の顕宗天皇）は、兄億計王（のちの仁賢天皇）とともに播磨国赤石郡に逃れ、名を隠して縮見屯倉首に仕えた。数年後、宴席で皇孫の名乗りをあげようとして弘計王が口にした歌が①で、『俊頼髄脳』の右の言説はこの記事によると思われるが、詠歌事情は異なる。『日本書紀』には兄弟が「牛馬を飼牧ふ」とあり、釣の話自体出てこない。なお『古事記』下巻

（安康天皇・清寧天皇・顕宗天皇の条）にも二皇子の逃避と発見、即位が語られるが、①詠は見えず、やはり「身を隠して、馬甘（うまかひ）・牛甘（うしかひ）に役（えだ）ちき」（安康天皇の条）とあって釣の話は見えない。『俊頼髄脳』の「釣りする者になりて……」が何によるのかはわからないが、この文脈では①詠に『日本書紀』の語る不遇からの転換、即位への道を拓く端緒といった要素は見えず、Bの川岸の柳枝が水面になびき動く景は、不遇な皇子の流離の情景と結びつけられていることを確認しておく。なお、平安期では①詠は祝意を表す文脈で用いられる。たとえば『栄花物語』巻十二「玉の村菊」の長和五年（一〇一六）後一条天皇即位の記事では、外祖父となった藤原道長の繁栄が「世は変らせたまへど、御身はいとど栄えさせたまふやうにて、『河ぞひ柳風吹けば動くとすれど根は静かなり』といふ古歌のやうに、動きなくておはしますも、えもいはずめでたき御有様なりしに……」（歌集・歌学書類に傍線部の本文は見出せない）と語られる。また『源氏物語』椎本巻頭部で、宇治の八の宮邸の対岸にある夕霧の別邸に中宿りした匂宮の目に映る景観が「はるばると霞みわたれる空に、散る桜あれば今開けそむるなどいろいろ見わたさるるに、川ぞひ柳の起き臥しなびく水影などおろかならずをかしきを……」と叙述される場面も、傍線部に引かれた①詠は上古の寿歌が伝承されたもので、匂宮の来臨をことほぐ気持をこめるかとする注がある。[4]『俊頼髄脳』に見える流離の情景はこれらと対照的である。

一方、①詠をもとに「川ぞひ柳」の語もやはり俊頼周辺から詠み出されていく。早い例は『堀河百首』で、春の「柳」題十六首中、四首に「川ぞひ（の）柳」の語が見える。

藻かり舟ほづつしめなは心せよ川ぞひ柳風に波よる　（一二〇　俊頼）

春風に波よる糸とみゆるかな川ぞひ柳水にひかれて　（一二三　基俊）

等（他に一二二・顕仲、一二五・隆源）、四首とも「波よる」景を詠む。他に同百首・夏の「荒和祓」題に一首（五四九・顕季）、また『散木奇歌集』にも一首（三〇一→二節に掲示）ある。①詠から「いなむしろ」と「川ぞひ柳」という二つの歌語が派生していったことになろう。

冒頭に掲げた崇徳院詠は久安六年（一一五〇）に成立した『久安百首』の歌で、この時点で歌語「いなむしろ」の例は①～④の四例（と万葉集の長歌）のみであった（なお久安百首では藤原季通の長歌・四九九にも「いなむしろ」の語が見えるが、柳は出てこない）。「いなむしろ」は『金葉集』『散木奇歌集』『俊頼髄脳』（『堀河百首』）と、俊頼周辺で見出されていった新しい歌材で、崇徳院詠はこうした潮流をふまえ、俊頼説によってBの意を詠んでみせた初例と位置づけられる。そこで次に、「いなむしろ」をめぐる歌学書の説を見渡してみる。

二　歌学書注説と崇徳院詠

「いなむしろ」の語義について、松野氏は平安期の歌学書の諸説を七つに分類している。[5] この分類をもとに、建久年間に成立した『和歌色葉』まで含め、諸説を次のように整理しなおしてみた。傍線は前述した『俊頼髄脳』に見える、帝の末である人があやしき童になってまどい歩くという伝承に言及するもの、『袖中抄』は掲示した語義を否定的に取り上げている場合〈袖中抄〉とした。

〔1〕水底の石…童蒙抄六、袖中抄所引能因歌枕（「みなむしろ」とする）

〔2〕水底の草…綺語抄（水底の柳／「みなむしろ」とする）・童蒙抄六（水底の柳葉のような草）・童蒙抄七（水下の青いもの）・奥義抄（川底の草）・袖中抄所引古抄物（水底の草）・袖中抄（川底の藻という草・水下の草）・和歌色葉（川底の草／「みなむしろ」とも）

〔3〕稲穂が出揃って筵を敷いたように見える…俊頼髄脳・綺語抄・奥義抄・袖中抄所引古抄物・〈袖中抄〉・和歌色葉

〔4〕川沿いの柳の枝が水に浸って流れるさまが「稲筵」に似る…俊頼髄脳・童蒙抄七・奥義抄・〈袖中抄〉・和歌色葉

〔5〕柳蔭が水に映る…〈袖中抄〉

〔6〕（流浪の）旅の意…奥義抄・袖中抄・和歌色葉

〔7〕田舎の意…袖中抄・和歌色葉

前掲『俊頼髄脳』の説A・Bは各々〔3〕と〔4〕に相当する。同書は多くの歌学書に見える〔2〕説（「みなむしろ」とも。括弧内参照）に言及していないが、川沿い柳が増水した水に浸かって底の玉藻となったと詠む俊頼の歌「五月雨は川ぞひ柳みがくれて底の玉藻となりにけるかな」（散木奇歌集・夏・三〇一）は〔2〕説と関わりそうである。[6]

また『奥義抄』で「いなむしろ」について詳述する藤原清輔（一一〇八～一一七七）は俊頼の次に実作・歌学双方で①詠に注目した歌人といえる。清輔は嘉応二年（一一七〇）住吉社歌合の「旅宿時雨」題で旅の意をこめて「いなむしろ」を詠み、判者俊成に批判され反論するという応酬があったことを松野氏が指摘するが、それ以前から①詠が喚起する流離の情景を現実と関わるかたちで詠んでいて、旅の意は心に残っていたと思われる。

左大臣経―阿波へ下られたりける供にまかりける者の、田舎人になりて朽ちはてなむずることを悲しびて、

柳によせて歌よみて送りける返事に

なにか思ふ流れになびく川柳その根はつよし朽ちもはてじぞ　（清輔集・四二三）

二条天皇親政をめざして後白河上皇と対立した藤原経宗が永暦元年（一一六〇）三月、阿波国に配流されたときの歌で、経宗の供として下った知人と清輔との間で、政治的に失脚して地方を流離するという状況で①詠が共有されている（清輔には他に①詠をふまえた「乍随不会恋」題の「川ぞひ柳」詠〈清輔集・二六七〉もある）。

清輔の『奥義抄』は、『俊頼髄脳』に続き、①詠を掲げて右の〔4〕説に言及する（点線部は俊頼髄脳に見えない）。

これは昔のみかどの末なりける人の、あやしのもし（ママ）になりて田舎にまどひゆけりけるが、釣しけるに、川面（かはづら）なる柳の水になびくを見て詠める歌なり。柳の末はとかくなれど根は動かぬを、我身に寄せてとかくまどへどわがもとは絶えじと詠めるなり。[7]

崇徳院の歌「あらしふく岸の柳のいなむしろおりしく波にまかせてぞ見る」は、岸の柳の枝が嵐に吹かれ水面に浸って波に揺れる光景を詠むもので、「いなむしろ」は〔4〕説の意で用いられている。崇徳院（一一一九～一一六四、在位一一二三～一一四一）は詠作にあたって前述の『俊頼髄脳』のB説や、初稿本が崇徳院に献上されたといわれる『奥義抄』[8]等に見える注説を参照し、歌学書では語られているがまだ実例のない新しい詠み方を試みたのであろう。[9]一節でみた『堀河百首』等で、①詠をもとに「川ぞひ柳」の「波よる」光景が詠まれていることも念頭にあったかもしれない。

また、『俊頼髄脳』も『奥義抄』も〔4〕説とともに「昔のみかどの末なりける人」（①詠を載せる日本書紀では顕宗天皇、和歌童蒙抄・六に①詠の作者として同天皇の名が見えるが、奥義抄・袖中抄は仁賢天皇〈前者は顕宗を兄とし、後者は顕宗説にも言及する〉とする）の流離伝承に触れている。「いなむしろ」の語を〔4〕の意で詠んだとき、不遇な皇孫の流離伝承は崇徳院の脳裏にもあったと思われる。これについて、近世に入ると加藤磐斎の『新古今増抄』が崇徳院の歌に寓意をみている。『日本書紀』に見える顕宗天皇・仁賢天皇の伝承に触れ、①詠を挙げて王の血筋が絶えないことを柳の根が失せぬことに譬えたものと解し、これを本歌としたうえで、崇徳院詠について「嵐吹くとは、崇徳院に荒くあたりたてまつるものにたとへ、柳を御身にたとへられたり」と述べ、保元の乱で讃岐に配流されたことをふまえた歌と注している。管見では中世の新古今注にはこうした寓意への言及は見えず、[10]増抄は右のような歌学書に見える「いなむしろ」の注説を取り込みそこに寓意を見出したものと思われる。しかし当該歌は乱勃発以前の『久安百首』の歌で、増抄の保元の乱云々というのは当たらない。ただ崇徳院がこの注説に注目した契機として、在京時の政治的不遇感から①詠にまつわる伝承に共鳴した可能性はあろう。この歌の寓意については四節で改めて考えたい。

『新古今集』が崇徳院のこの歌を採ったことは興味深い。「いなむしろ」は一節に掲げた『金葉集』の③以後、勅撰集では『詞花集』『千載集』になく、『新古今集』に二例見える。崇徳院の当該歌と、秋の田の仮寝の情景を詠んだ、

秋の田のかりねの床のいなむしろ月宿れともしける露かな　（秋上・四三〇　大中臣定雅）

であり、同集は「川柳」と「田家」という、『俊頼髄脳』の二説に沿ってこの語の代表的な詠法を整理したかたちになっている。たとえば藤原定家は作例二首（初学百首・老若五十首歌合）とも柳とともに詠み、後鳥羽院の主催した建仁元年（一二〇一）八月十五夜撰歌合では「田家見月」題で後鳥羽院・藤原良経・源通親が〔3〕の意で詠むなど、新古今時代にも「いなむしろ」の作例はある。そうした当代歌人の歌は採られず、崇徳院と定雅（一一二三～一一八九）の歌を入れたのは、「いなむしろ」が院政期の試みを象徴する歌語として扱われているということになろう。なお新古今時代以後は、松野氏も指摘するように「いなむしろ」の例は〔3〕の田家の意に偏っていく。後代からみると崇徳院の「柳」詠はむしろ新鮮であり、こうした注釈史を背負う「いなむしろ」の語を――『日本書紀』に見える皇孫の流離伝承を想起させる〔4〕の意で――入集させた『新古今集』の面白さは際立っている。[11]

崇徳院の歌は『新古今集』に七首採られている（春上・七一、春下・一三一、秋上・二八六、冬・六八五、雑下・一八〇四、釈教・一九四五・一九四六）。四季四首はすべて『久安百首』の歌で、このうち春下の一首「山高み岩根の桜散るときは天の羽衣なづるとぞみる」（一三一）は、『拾遺集』の「君が世は天の羽衣まれにきて撫づとも尽きぬ巌ならなん」（賀・二九九・読人不知）を本歌とする。この拾遺集歌について、やはり『奥義抄』が、天人が三年に一度地上に下って三銖の軽い羽衣で四十里四方の大岩を撫で尽くすまでの長久の時間を一劫とする、という仏説に言及していて、一三一はこれをふまえて解釈される。『新古今集』の崇徳院詠七首のうち、七一の「いなむしろ」と一三一の「天の羽衣なづ」は歌学書の注説を背負う語、二八六は「そそや秋」、六八五は「あなかままだき」と口語的表現を取り入れていて、四季四首はいずれも院政期の試みを象徴するような特徴的な歌が採られていることになる（残り三首は仏教的な歌である）。『新古今集』の崇徳院は院政期歌壇の試みを体現する存在として位置づけられよう。

三　勅撰集の「柳」歌群

崇徳院の「いなむしろ」詠は『新古今集』の「柳」歌群という視点からも注目される。いま勅撰集・春部における「柳」詠の分布を展望すると、次頁の【表1】のようになる（⑤金葉集の「二」「三」は各々二度本・三奏本の意。参考として新葉集も掲げた）。『古今集』春上の二首、

青柳の糸よりかくる春しもぞみだれて花のほころびにける　（二六　貫之）

あさみどり糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か　（二七　遍昭）

は柳枝を糸に見立て、撚る・かく・乱る・ほころぶと糸の縁語で構成し、玉にたとえた白露と取り合わせる等、以降の各集にも見える柳詠の典型を示している。以下、柳詠は春上に置くものが主流だが、配置は梅の前後、桜や帰雁の前、春雨や霞に隣接させる等、数種のパターンがある。「いなむしろ」で注目した『金葉集』は伝本により柳詠の歌数も異なり、初撰二度本系の橋本公夏筆本に俊頼の「川ぞひ柳」詠（堀河百首・一二〇〈↓一節〉）があって、「いなむしろ」伝承への関心と連動している（これ以外に「川ぞひ柳」の勅撰集への入集は新続古今集の一首〈八九〉のみ）。【表1】の「歌群歌数」欄に示したように、柳詠が三、四首の歌群として見えるようになるのは『拾遺集』からで、『千載集』春部には柳詠自体がないが、『新古今集』で急増して八首の歌群を形成する。以降、十三代集では柳歌群の存在が概ね定着しており、『新勅撰集』と京極派の『玉葉集』『風雅集』の歌数が多いこと（玉葉集は古人詠が多い。風雅集は京極派歌人の歌が多く、春中巻頭から二十首の歌群を形成する）、北朝の三集（新千載・新拾遺・新後拾遺）は歌数を揃えていることが指摘できる。また、【表1】の「地名詠数」「歌番号・地名」欄には「柳」詠のうち地名の見えるものを抽出した（詞書の地名は数えない）。勅撰集・春部の柳詠で具体的な地名が登場するのも『新古今集』からであり[12]、これにより柳詠の世界・景観が

【表１】勅撰集・春部の柳詠

歌集名	部立	歌番号	歌群歌数	地名詠数	歌番号・地名
①古今集	春上	26～27・56	2		
②後撰集	春上	41			
	春中	58・67			
	春下	94・131			
③拾遺集	春	32～35	4		
④後拾遺集	春上	74～76・82	3		
⑤金葉集・二	春	23～25	3		
金葉集・三	春	17・28～32	5		
⑥詞花集	春	14～16	3		
⑦千載集		ナシ			
⑧新古今集	春上	68～75	8	3	70吉野川・72六田の淀・74葛城山
⑨新勅撰集	春上	22～30	9	1	30葛城山
⑩続後撰集	春上	45～48	4	1	48竜田の岸
⑪続古今集	春上	71～74	4		
⑫続拾遺集	春上	40～42	3		
	春下	73		1	73葛城山
⑬新後撰集	春上	39			
⑭玉葉集	春上	35・83・87～96・104～106	10・3	2	87佐保の河原・96竜田河原
	春下	156・217・255			
⑮続千載集	春上	43～44	2		
⑯続後拾遺集	春上	41～46	6	1	41竜田河原
	春下	115			
⑰風雅集	春上	43・59・87			
	春中	91～110・121・123	20	3	98六田の淀・99広沢の池・100吉野川
⑱新千載集	春上	57～63	7		
⑲新拾遺集	春上	62～68	7		
⑳新後拾遺集	春上	53～59	7	1	56飛鳥（−風）
㉑新続古今集	春上	89～92	4	2	89佐保山・92竜田川／三室の岸
※新葉集	春上	41～42	2	1	42神南備の三室の岸

一気に広がっている。『新古今集』は数値的にみても内容的にみても「柳」歌群の転機といえよう。では、どのような歌群を形成しているのか、「いなむしろ」詠はそのなかにどのように組み込まれているのか、次にその歌群の構成をみていきたい。

四　『新古今集』春上の「柳」歌群

崇徳院の「いなむしろ」詠を含む、『新古今集』春上の八首の「柳」歌群を掲げる。

延喜御時屏風に　　凡河内躬恒

春雨のふりそめしより青柳の糸のみどりぞ色まさりける　（六八）

題しらず　　大宰大弐高遠

うちなびき春はきにけり青柳のかげふむ道に人のやすらふ　（六九）

輔仁親王

み吉野の大川のへの古柳かげこそ見えね春めきにけり　（七〇）

百首歌の中に　　崇徳院御歌

あらしふく岸の柳のいなむしろおりしく波にまかせてぞ見る　（七一）

建仁元年三月歌合に、霞隔ツ遠樹ヲ といふことを　　権中納言公経

高瀬さす六田の淀の柳原みどりもふかく霞む春かな　（七二）

百首歌よみ侍ける時、春歌とてよめる　　殷富門院大輔

春風の霞ふきとく絶えまよりみだれてなびく青柳の糸　（七三）

千五百番歌合に、春歌　　藤原雅経

白雲の絶えまになびく青柳の葛城山に春風ぞふく　　（七四）

藤原有家朝臣

青柳の糸に玉ぬく白露のしらずいくよの春かへぬらん　　（七五）

歌人の配列は概ね時代順で、平安中期の躬恒、高遠の屏風歌で始まり、中盤は院政期の輔仁親王、崇徳院、大輔と当代の公経が交錯、末尾二首は撰者でもある雅経と有家で締める。まず六八は、「春雨」の歌群（六三～六六、間に雨中苗代を詠む六七を挟む）と「柳」歌群を繋ぐ歌。「降り初め」に糸・青・緑・色の縁語「染め」を掛け、春雨に煙る空間に柳枝の鮮やかな春色が描き出される。六九は芽吹いた柳の木陰で人が休息する情景。『大弐高遠集』（二六）によれば長保元年（九九九）十一月、藤原道長女彰子入内の折の屏風歌で、題は「柳ある所」、これを柳を街路樹とした平城京や平安京の朱雀大路の景ととらえ、春の平安京の大路の景観に女御入内と御代の安寧への祝意をこめたものとみる説がある。[13]「かげふむ道」は「橘の影踏む道の八衢に物をそ思ふ妹に逢はずして」（万葉集・巻二・一二五・三方沙弥）による語、「春」の枕詞「うちなびき」も「うちなびく」の形で『万葉集』に見える語で、一首には万葉調の響きがある。この万葉摂取と彰子の名を出さず「題しらず」とした扱い、次歌七〇から舞台が大和地方に転じることから、六九は『新古今集』においては平城京の景観か、あるいは西行の「道のべに清水流るる柳かげしばしとてこそ立ちとまりつれ」（夏・二六二）に通じるような旅路の情景ととらえられるかもしれない。

七〇の「み吉野の大川」は大和国の歌枕、吉野川。吉野川のほとりの柳の古木にひっそりと訪れた春を詠む。山深い古京の地では、前歌の人の行き通う道とはちがって、柳の芽吹きもまだ木陰を作るほどではない。なお吉野は万葉の時代には山より川が多く詠まれた[14]（新古今集では吉野川は当該歌を含め二首、吉野山が八首、他に吉野の宮が一首）。この歌も吉野川を詠み、かつ『古今集』に見える万葉調の歌「み吉野の大川のへの藤波のなみに思はばわが恋ひめやは」（恋四・

六九九・読人不知）の初二句を取り入れている点で万葉調の響きを有している。作者輔仁親王（一〇七三～一一一九）は後三条天皇第三皇子で本集にはこの一首のみ。兄白河天皇に立太子を阻まれ隠棲したことが知られている。「古柳」は先例の見えない語だが、後代には「道のべに朽ちてやみぬる古柳もとの心に春や忘れぬ」（為家千首・春・八三）等の例があり、述懐性と結びつきやすい語といえる。七〇の「古柳」にも、わが身を投影する述懐性が認められよう。[15] そしてこの歌の述懐性と連動して、続く七一の崇徳院詠にも、『俊頼髄脳』の語るような「いなむしろ」をめぐる伝承――流浪する皇子が柳の傍らで川面を見つめている姿が浮かび上がってくる。七一の嵐吹く岸辺の情景の前で立ちすくみ、ただ見つめる姿には、流された崇徳院の運命を重ねてみることもできよう。二節でこの歌について『新古今増抄』の言及する寓意を否定した。いま改めて、崇徳院の詠作時点では歌学書の注説にもとづく詠であったが、その後に流され配所で流離の末の死を迎えたことで、いわば自身の運命を予見した歌と化したととらえ返してみる。詠作時に「いなむしろ」をめぐる注説が孕んでいた流離伝承が『新古今集』編纂時点で改めて注目され、意識されているように思われるのである。『新古今集』の崇徳院は院政期歌壇の試みを体現する存在としてとらえられると先に述べた。同集は『千載集』のように崇徳院の鎮魂を表立ってはしていない。しかしこの特異な歌を撰んだときにその末路は想起されていたであろうし、崇徳院の入集歌七首のうち、前述した四季四首以外の三首が仏教的な歌であることには、やはり鎮魂の意図が認められるように思う。

ただしその意図はさらに続く水辺の柳の景観のなかに霞んでゆき突出しない。七二の「六田の淀」は大和国の歌枕で、吉野町・大淀町付近を流れる吉野川の称。出典の建仁元年（一二〇一）晩春三月二十九日の新宮撰歌合（後鳥羽院主催、判者は俊成、二番右持）では、「六田の淀」について、左方人に「『高瀬さす六田の淀』とはいづこと思へるにか、六田の淀とは吉野川とこそ万葉集にも詠みたれ、柳原六田の淀に証歌の侍るにや、おぼつかなし」と難じられている（判詞も「右歌六田の淀おぼつかなし」として持）。『万葉集』には左方人のいうように「音に聞き目にはいまだ見ぬ吉野川六田の淀を今日見つるかも」（巻七・雑歌・一一〇五）の例が見える。また、この非難に対し右方人が「六田の淀の柳、古歌に

よみならはして侍るにや」と陳じている。同じく『万葉集』の「かはづ鳴く六田の川の川楊のねもころ見れど飽かぬ川かも」（巻九・雑歌・一七二三）を念頭に置いた発言であろうか。いずれにしろ六田の淀も、新古今歌人にとって『万葉集』を想起する地名であったことが知られよう。ゆるやかな流れに舟が棹さしてゆく六田の淀、岸の柳原、歌群冒頭六八で色濃くなったその緑の色もさらに深く、すべてが緑の霞に包まれてゆく、一幅の絵のような光景である。以上、七〇～七二の三首は水辺の柳の歌。七三で再び柳をクローズアップして、残り二首へ転調する。また、七二・七三は霞、七三・七四は春風と、景物は重なりつつ移ろってゆく。

七三は一面の霞が春風に吹き分けられ、その絶え間から風に乱れてなびく柳枝が見えるという歌。その絶え間の柳枝が七四で遠景に転じる。末尾の二首は後鳥羽院の主催した『千五百番歌合』の歌を並べる。七四の「葛城山」も大和国の歌枕、河内との国境にある金剛山系の主峰で、その山の端にかかる白雲の絶え間に風になびく青柳を遠望する。白雲と青柳の色彩の対照も鮮明で、山上を吹く春風が見えるような歌である。なお、「青柳の葛城山」は万葉歌「春柳葛城山に立つ雲の立ちても居ても妹をしそ思ふ」（巻十一・二四五三・柿本人麻呂歌集）の次点本の訓による語を実景に転じたものとされ、定家に先例が見える。[16] 続く七五の上句は「白」の同音反復で「知らず」を導く序、柳枝に連なる白露の景は『古今集』の「あさみどり糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か」（↓三節）により、下句は「青柳の緑の糸をくり返しいくらばかりの春をへぬらん」（拾遺集・賀・二七八・清原元輔）をふまえて御代の長久を祝う。前歌の山上に青柳を遠望する空間的な遙けさから、この歌の過去から未来へ連綿と続く時間的な遙けさへという展開であり、柳枝に置いた白露が春の陽光にきらめく光景に悠久性を見出して歌群のまとめとする。

「柳」はこうした祝意と七〇のような述懐性の両極を表現しうる語でもあった。右の拾遺集歌は賀歌だが、『後拾遺集』春上の天徳四年（九六〇）内裏歌合の歌「あらたまの年をへつつも青柳の糸はいづれの春か絶ゆべき」（七四・坂上望城）等、春部の柳詠にも長久を言祝ぐ意は散見する（新勅撰集・二八、新後拾遺集・五三等）。一方、述懐性は他の勅撰集春

【表２】勅撰集・春部の柳詠にみえる地名

地名	歌数	歌集名・歌番号
飛鳥	1	新後拾遺・56
葛城山	3	新古今・74、新勅撰・30、続拾遺・73
佐保川・山	2	玉葉・87、新続古今・89
竜田川・岸	4	続後撰・48、玉葉・96、続後拾遺・41、新続古今・92
広沢の池	1	風雅・99
三室の岸	2	新続古今・92、新葉・42（神南備の-）
六田の淀	2	新古今・72、風雅・98
吉野川	2	新古今・70、風雅・100

部の柳詠には見出せない。『新古今集』が地名に加え、賀部や雑部の歌に見出せるような祝意と述懐性を取り込んでいることも、春の柳歌群の世界に広がりをもたらしている。

五　『新古今集』と大和の春

以上、『新古今集』春上の六八～七五は、雨中、道端、水辺、霞中、山上と所をかえて風になびく柳枝の緑の濃淡と、末尾二首に添えられた白の色彩――この「緑の濃淡」と「白」の点景は、次歌七六「薄く濃き野辺のみどりの若草に跡まで見ゆる雪のむら消え」（宮内卿）の野辺の緑の濃淡と残雪に引き継がれる――もみずみずしく豊かで、春の部に美しい彩りを添える歌群を形成している。同時に、この柳歌群で特徴的なのは古代の面影であろう。地名の見える七〇「み吉野の大川」・七二「六田の淀」・七四「葛城山」はいずれも大和国の歌枕、六九は万葉摂取で、七〇の「み吉野の大川のへの」、七二の「六田の淀」、七四の「青柳の葛城山」も『万葉集』を想起させる語、そして七一の「いなむしろ」は『日本書紀』に見える古代の天皇即位にまつわる伝承を喚起する語である。柳糸そのものをクローズアップした六八・七三・七五以外のすべての歌に、大和地方を中心とした古代の面影がある。

先に春部の柳詠に地名が見えるのは『新古今集』からと述べた。『新古今集』

の地名詠については、田尻嘉信氏が同集に見える名所歌枕を調査して、山城に次いで大和が多いこと、四季部に歌枕の使用が顕著なことを指摘している。[17] 氏の掲げる部立ごとの歌枕使用歌数の国別集計結果では、春部の大和詠が二十八首と抜きん出て多く、柳歌群の大和詠もそうした傾向の中に位置づけられることが確認される。また、以降の勅撰集でも、春部の柳詠に登場する地名は大和に集中している。【表2】として、勅撰集・春部の柳詠に見える地名（三節に掲げた【表1】の「歌番号・地名」欄に掲出したもの）を地名ごとに集計してみた。八つの地名のうち、山城の「広沢の池」以外はすべて大和地方が並ぶ。この傾向は『新古今集』が先蹤となって生まれたようにもみえるが、同集の場合、「大和」の多用は春部の構想に関わる意図がありそうである。

柳歌群の配される『新古今集』春上の巻頭には、摂政良経と下命者後鳥羽院の「大和」の立春を詠む歌が並んでいる。

み吉野は山もかすみて白雪のふりにし里に春は来にけり　（一　良経）
ほのぼのと春こそ空に来にけらし天の香具山かすみたなびく　（二　後鳥羽院）

皇室にゆかりの深い古京の地吉野と、神話を想起させる天の香具山の立春である。田中喜美春氏はこの二番歌の本歌と収録位置に注目して、後鳥羽院が延喜・天暦の醍醐・村上両帝だけでなく、持統、舒明、仁徳など古代の天皇にも「治者の理想像」を見ていたこと、二番歌を配置することでその姿を踏襲しようとしたことを論じている。[18] また周知のように、春下の巻軸には同じく良経の古京志賀の暮春を詠む歌「あすよりは志賀の花園まれにだにたれかはとはん春のふるさと」（一七四）が置かれ、春上巻頭一番歌と照応している。時の摂政と太上天皇が並び立って古代憧憬という本集の志向を宣言するような巻頭二首であり、柳歌群に色濃い古代の面影もこの二首と呼応して、春部の構想を担っていると思われる。

いま地名に注目して『新古今集』春部を見渡すと、春上の九十八首中、地名詠は三十五首（約36％）見出せる。そのうち大和の地名は二十一首（60％）、その内訳は右の巻頭二首（一・二）のあと、春日野の若菜（一〇・一一・一三）、巻向の檜原・春日野の残雪（二〇・二二）を経て、巻後半の七〇番歌以降に十四首が集中（七〇番歌以降に見える地名はすべ

て大和のものになる）、十四首のうち、七〇・七二・七四の三首が本稿でみた柳歌群の歌、春日野の野焼きの一首（七八）を挟み、七九以降の十首（七九吉野山、八五竜田山、八六吉野山、八七葛城・高間・竜田、八八石上ふるき都、九〇竜田山、九一竜田山小倉の峰、九二吉野山、九六石上布留野、九七吉野の宮）が桜の歌である。なお、春下は七十六首中、地名詠十八首（24％）とやや少なく、大和は半数の九首、そのうち桜を詠む六首（山吹と桜を詠みこむ一五八まで含める）が吉野詠となっている。『新古今集』春部の構成のなかで見るとき、大和地方を中心とした柳歌群は、大和の地名が頻出する桜歌群への導入的な役割を果たしていると位置づけられよう。『新古今集』春上は巻頭の大和の立春を詠む二首に照応して、間に春日野の景などをちりばめつつ、後半の柳歌群で再び大和の情景を喚起し、春の大きなテーマであり春上終盤から春下の大部分にまたがる桜の歌群に繋げていく展開になっていると考える。

時に祝意をこめて詠まれ、悠久の時を表象しうる柳は、遙か古代の情景を喚び起こすよすがとしてふさわしい。『新古今集』春部では、時を超えて風になびく柳枝の彼方に、古代を髣髴させる大和の情景が浮かび上がってくる。さらに柳歌群は最終的に、

青柳の糸に玉ぬく白露のしらずいくよの春かへぬらん　（七五）

という『千五百番歌合』の有家の歌で祝意を導き出して閉じられる。この祝意は（詠作時も同歌合主催者の後鳥羽院に向けられたものであったが）、本集下命者の後鳥羽院に対して御代の長久を言祝ぐものである。大和を中心に古代の情景を描き出した柳歌群の末尾に付された祝意は、春上巻頭で大和を舞台に春の訪れを宣言する後鳥羽院の姿と呼応しているのではないだろうか。

注

（1）松野陽一「住吉社歌合の俊成判詞について――歌語「いなむしろ」をめぐって――」（『すみのえ』一九七、一九九〇年七月）。

以下、松野氏の論の引用はこれによる。

（2）①は第六・四一五五「やなぎ」・作者名不記・下句「おきふしすれどそのねたえせず」、②は第二・一三九一「むしろ」・作者名不記・下句「しきても君がこひらるるかな」。なお②は『人丸集』一三に下句を「しきても人を見るよしもがな」として見え、のちに『新勅撰集』恋四・八八〇に作者を人麻呂としてこの形で入集する。

（3）新日本古典文学大系『金葉和歌集　詞花和歌集』（岩波書店、一九八九年）、金葉集は川村晃生・柏木由夫校注。

（4）新編日本古典文学全集『源氏物語⑤』（阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注、小学館、一九九七年）。

（5）松野氏注（1）論文。①水底の石、②水底の草（藻）、③川沿いの柳の下枝が水に漬いたもの、④稲末（穂）が整ってむしろのように見えわたる、⑤柳蔭が水に映る、⑥田舎の意、⑦（流浪の）旅の意、の七つ。

（6）俊頼詠は顕季の「五月雨に安積の沼の花かつみ底の玉藻となりやしぬらん」（六条修理大夫集・二八七）と似る。柳詠では清輔の『和歌一字抄』に「青柳のうつれる影を池水の底の玉藻と思ひけるかな」（六四四・通宗「柳臨池水」）という歌が見える。清輔から六条藤家の歌学を継いだ経家も「うちなびく川ぞひ柳枝ひちて底の玉藻にわきぞかねぬる」（正治初度百首・春・一〇一四）と詠んでいる。

（7）さらに「かくまどひあるけば」いなむしろとは「旅の心」だという説を挙げ、その説より根拠のある解釈として、川底に短い草が筵を敷いたように生えたのをいなむしろといい、「この柳の末の水に浸るがかのいなむしろに似たればかく詠める」と述べる。

（8）六百番歌合・恋十・十五番「寄海人恋」の顕昭詠（左負・一一六九）に見える難義語「海人のまくかた」に対する俊成判詞と、それに反駁した顕昭陳状の言説、また、このことについて俊成が定家に語った僻案抄・三代集問事の記事から、清輔が奥義抄を初め崇徳院に献上し、のちに増補して二条院に献じたことが推定されている。

（9）佐藤明浩「詠歌の場としての定数歌――『久安百首』と歌学――」（浅田徹・藤平泉編『古今集　新古今集の方法』笠間書院、二〇〇四年）は歌学書における歌語の付注と百首歌の詠作が密接に関わっていたことを論じるなかで、一例として崇徳院の当該歌を挙げ、「『奥義抄』そのものかどうかは別として、崇徳院はそこに記されたような注説を知っていて、その知識に基づいて「いなむしろ」を詠んだ可能性が高い」と指摘している。なお、後掲の「天の羽衣なづ」も、同論文の付表「『久安百首』に詠ま

れた付注歌語一覧」に載る。

(10) 増抄と同じ江戸時代前期の新古今不審問答には「御下心在之」という説が引かれるが否定されている。また増抄以降では、契沖書入本に「此稲席は、矢田部公望が日本紀私記説に依て、よませ給へり」とあるのみ。

(11) 他に、勅撰集春部の柳詠では、玉葉集の「波かくる竜田河原のふし柳梢は底の玉藻なりけり」(春上・九六・俊恵)が前述の散木奇歌集・三〇一と注(6)の歌々を想起させるものとして注目される。

(12) 新古今集以前は、「都」が一首(古今集・五六)、「ふるさとの御垣」が一首(金葉集三奏本・三二=詞花集・一六)見えるのみ。なお、【表1】には佐保(川・山)を挙げたが、「佐保姫」六首(金葉集三奏本・三一=詞花集・一四、玉葉集・九二、続千載集・四三、続後拾遺集・四二、新千載集・六〇、新拾遺集・六五)は掲出していない。

(13) 中川博夫『大弐高遠集注釈』(貴重本刊行会、二〇一〇年)。

(14) 久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店、一九九九年)「吉野」の項(鈴木日出男執筆)。

(15) 柳歌群の後に見える歌「荒小田のこぞの古跡の古蓬今は春べとひこばへにけり」(七七・曾禰好忠)の「古跡の古蓬」には、やはり自身を投影するかのような自嘲的な気分が認められる。

(16) 「青柳の葛城山の花ざかり雲に錦をたちぞかさぬる」(拾遺愚草・上・一一一、文治二年〈一一八六〉二見浦百首)。

(17) 田尻嘉信「新古今集「名所」目録稿」(『跡見学園国語科紀要』二〇、一九七二年三月)。

(18) 田中喜美春「後鳥羽院の香具山」(『国語と国文学』一九七七年二月)。

*『新古今集』の引用は『国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書』(伝冷泉為相筆本)に、『俊頼髄脳』の引用は『冷泉家時雨亭叢書』による。踊り字はひらき、清濁を分かち、句読点を付す等、読みやすい表記に改めた。他の歌集(万葉集を除く)および歌番号は新編国歌大観に、『奥義抄』等の歌学書は日本歌学大系に、『新古今増抄』等、新古今集の古注は新古今集古注集成による。いずれも漢字は適宜当てた。その他『万葉集』『日本書紀』『古事記』『栄花物語』『源氏物語』の引用は新編日本古典文学全集による。